

モーセの生涯 (1)

2008. 9. 2 (火)

バック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

出エジプト記 1章6節から2章10節まで

そしてヨセフもその兄弟たちも、またその時代の人々もみな死んだ。イスラエル人は多産だったので、おびたしくふえ、すこぶる強くなり、その地は彼らで満ちた。さて、ヨセフのことを知らない新しい王がエジプトに起こった。彼は民に言った。「見よ。イスラエルの民は、われわれよりも多く、また強い。さあ、彼らを賢く取り扱おう。彼らが多くなり、いざ戦いというときに、敵側についてわれわれと戦い、この地から出て行くといけないから。」そこで、彼らを苦役で苦しめるために、彼らの上に労務の係長を置き、パロのために倉庫の町ピトムとラメセスを建てた。しかし苦しめれば苦しめるほど、この民はますますふえ広がったので、人々はイスラエル人を恐れた。それでエジプトはイスラエル人に過酷な労働を課し、粘土やれんがの激しい労働や、畑のあらゆる労働など、すべて、彼らに課する過酷な労働で、彼らの生活を苦しめた。また、エジプトの王は、ヘブル人の助産婦たちに言った。そのひとりの名はシフラ、もうひとりの名はプアであった。彼は言った。「ヘブル人の女に分娩させるとき、産み台の上を見て、もしも男の子なら、それを殺さなければならない。女の子なら、生かしておくのだ。」しかし、助産婦たちは神を恐れ、エジプトの王が命じたとおりにせず、男の子を生かしておいた。そこで、エジプトの王はその助産婦たちを呼び寄せて言った。「なぜこのようなことをして、男の子を生かしておいたのか。」助産婦たちはパロに答えた。「ヘブル人の女はエジプト人の女と違って活力があるので、助産婦が行く前に産んでしまうのです。」神はこの助産婦たちによくしてくださった。それで、イスラエルの民はふえ、非常に強くなった。助産婦たちは神を恐れたので、神は彼女たちの家を栄えさせた。また、パロは自分のすべての民に命じて言った。「生まれた男の子はみな、ナイルに投げ込まなければならない。女の子はみな、生かしておかなければならない。」さて、レビの家のひとりの人がレビ人の娘をめとった。女はみごもって、男の子を産んだが、そのかわいいのを見て、三ヶ月の間その子を隠しておいた。しかしもう隠しきれなくなったので、パピルス製のかごを手に入れ、それに瀝青と樹脂とを塗って、その子の中に入れ、ナイルの岸の葦の茂みの中に置いた。その子の姉が、その子がどうなるかを知ろうとして、遠く離れて立っていたとき、パロの娘が水浴びをしようとナイルに降りて来た。彼女の侍女たちはナイルの川辺を歩いていた。彼女は葦の茂みにかごがあるのを見、はしためをやって、それを取って来させた。それをあけると、子どもがいた。なんと、それは男の子で、泣いていた。彼女はその子をかわれに思い、「これはきっとヘブル人の子供です。」と言った。そのとき、その子の姉が

パロの娘に言った。「あなたに代わって、その子に乳を飲ませるため、私が行って、ヘブル女のうばを呼んでまいりましょうか。」パロの娘が、「そうしておくれ。」と言ったので、おとめは行って、その子の母を呼んで来た。パロの娘は彼女に言った。「この子を連れて行き、私に代わって乳を飲ませてください。私がああなたの賃金を払いましょう。」それで、その女はその子を引き取って、乳を飲ませた。その子が大きくなったとき、女はその子をパロの娘のもとに連れて行った。その子は王女の息子になった。彼女はその子をモーセと名づけた。彼女は、「水の中から、私がこの子を引き出したのです。」と言ったからである。

ヘブル人への手紙 11章23節から26節

信仰によって、モーセは生まれてから、両親によって三ヶ月の間隠されていました。彼らはその子の美しいのを見たからです。彼らは王の命令をも恐れませんでした。信仰によって、モーセは成人したとき、パロの娘の子と呼ばれることを拒み、はかない罪の楽しみを受けるよりは、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。彼は、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる大きな富と思いました。彼は報いとして与えられるものから目を離さなかったのです。

今日から、何回かにわたって、モーセの生涯について一緒に考えてみたいと思います。今、司会の兄弟も、自分の信仰は大したものではなかったと言われました。今日の集いもそのような駄目な者の集いであれば、幸いではないでしょうか。しかしイエス様は忠実であられますから、駄目な者を捨てようとはなさらないので、本当に感謝なことです。

二、三箇所引用します。モーセについての箇所です。

申命記 18章18節

わたしは彼らの同胞のうちから、彼らのためにあなたのようなひとりの預言者を起こそう。わたしは彼の口にわたしのことばを授けよう。彼は、わたしが命じることをみな、彼らに告げる。

申命記 5章5節

そのとき、私は主とあなたがたとの間に立ち、主のことばをあなたがたに告げた。あなたがたが火を恐れて、山に登らなかつたからである。

テモテへの手紙・第一 2章5節

神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです。

民数記 12章3節

モーセという人は、地上のだれにもまさって非常に謙遜であった。

マタイの福音書 11章29節

「わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。」

へブル人への手紙 3章5節

モーセは、しもべとして神の家全体のために忠実でした。それは、後に語られる事をあかしするためでした。

聖書の中に何度も何度も「わがしもべモーセ」ということばが出てきます。もし主が次のようにおっしゃることができるなら、例えば、「わがしもべM」、「わがしもべK」、「わがしもべH」、「わがしもべY」と言うことがおできになれば、素晴らしいでしょう。

主はモーセを指して、「わがしもべモーセ」と言うことがおできになりました。パウロはテサロニケの信者たちに、「あなたがたは偶像を捨て、神に立ち返り、『生けるまことの神』に仕えるようになった」と書き送りました。つまり「あなたがたは、主に仕えるしもべたちです」と。

また御霊は、私たちに対しても次のように呼びかけておられるのではないかと思います。
コリント人への手紙・第二 5章15節

また、キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。

彼らは、もちろん悔い改めてイエス様を信じて救われたのですが、それだけではなく、彼らは「主に仕えるようになったのです。よみがえられた方のために生きるようになった」のです。つまり「よみがえられたお方のために生きる」、これが私たちの人生の目的であるべきです。

いったいどうしたら、私たちはモーセのように、まことの主のしもべになることができるのでしょうか。また今の時代における主に対するご奉仕とは、いったいどのようなものであるべきでしょうか。

モーセが召されたとき、主は跡継ぎである「ヨシュア」に言われたのです。
ヨシュア記 1章1節、2節

さて、主のしもべモーセが死んで後、主はモーセの従者、ヌンの子ヨシュアに告げて仰せられた。「わたしのしもべモーセは死んだ。今、あなたとこのすべての民は立って、このヨルダン川を渡り、わたしがイスラエルの人々に与えようとしている地に行

け。』

と書かれています。

では、今の時代における主のみこころにかなう奉仕とはいったいどのようなものなのでしょうか。パウロは、奇跡的に導かれ救われました。そして主のしもべになったのです。使徒の働き 26章16節から19節

『…起き上がって、自分の足で立ちなさい。わたしがあなたに現われたのは、あなたが見たこと、また、これから後わたしがあなたに現われて示そうとすることについて、あなたを奉仕者、また証人に任命するためである。わたしは、この民と異邦人との中からあなたを救い出し、彼らのところに遣わす、それは彼らの目を開いて、暗やみから光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、わたしを信じる信仰によって、彼らに罪の赦しを得させ、聖なるものとされた人々の中において御国を受け継がせるためである。』こういうわけで、アグリッパ王よ、私は、この天からの啓示にそむかず、』

どうして背かなかったかと言いますと、用いられるためにです。主のしもべとなるためです。

このことばに示されていますように、奉仕の一つは、異邦人の心の目が開かれ、罪の暗闇から異邦人が解き放たれ、救い出され、神の光のうちに、主の力のうちに、導き出される、そのために働くことです。しかし、今の時代におけるご奉仕は、それだけでは十分ではないのではないかと思います。

もう一つ大切なことがあります。それは次のことです。エペソ人への手紙4章13節。(ご存じのように、新約聖書の手紙はイエス様を紹介するためだけではなく、もうすでに救われた人々がイエス様をよりよく知るために、主のしもべとして用いられるために、書かれたものです。)

エペソ人への手紙 4章13節

ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。

と記されています。これが新約聖書におけるご奉仕の大切な一面です。

まことのご奉仕は、常にこの二つの面を備えています。伝道だけではなく、もう一つの面、すなわち「自らを顧み、キリストの恵みに生きる」という面もなければなりません。

多くの方は未信者が悔い改めるとそれで満足しています。けれど主のみこころはそれで終わりではありません。悔い改めて信者になったキリスト者が、イエス様の満ち満ちた徳の高さにまで成長しなければならないということです。ここまで考えなければ、まことのご奉仕とは言えないのではないのでしょうか。

パウロは、まことのご奉仕を知りました。彼は次のように宣言したのです。

使徒の働き 20章 26節、27節

「ですから、私 はきょうここで、あなたがたに宣言します。私 は、すべての人たちが受けるさばきについて責任がありません。私 は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいたからです。」

これこそ、パウロのご奉仕が祝福された秘訣です。パウロはご奉仕をしながら、主のご目的をはっきりと心に描いて、それをひたすら目指し求めていたのです。モーセも、パウロと同じでした。

出エジプト記 15章 13節

「あなたが贖われたこの民を、あなたは恵みをもって導き、御力をもって、聖なる御住まいに伴われた。」

と記されています。このとき、イスラエルの民は、まだ旅の初めであり、聖なる住まい、すなわちカナンの地にはまだまだほど遠いところにおりました。しかし、モーセは主のまごころを心に描き、まだ見ぬところのものを信仰によって見て、「あなたの聖なる住まいに伴われた」と、歌ったのです。

私 たちも、モーセやパウロのように実り多いまことのご奉仕をしようと思えば、主の最終のご目的を上からの光によって、心の目ではっきりと見なければならぬのではないのでしょうか。しかしこの主の最終のご目的を心の目で見ると、主との交わりが必要です。

聖書を読んでいると、モーセは模範的な主のしもべであったことがわかります。それとともに、モーセはイエス様と比較されています。このモーセとイエス様との比較について少し考えたいと思います。

申命記 18章 15節

あなたの神、主は、あなたのうちから、あなたの同胞の中から、私 のようなひとりの預言者をあなたのために起こされる。彼に聞き従わなければならない。

これは、モーセがイスラエルの民に言っている言葉です。「私 のようなひとりの預言者を起こされる」とありますが、このひとりの預言者とはもちろん他ならぬイエス様です。

ここでモーセは、自らをイエス様と並べて比較していますが、使徒行伝の中に書かれている、石で打たれて輝かしい殉教の死を遂げたステパノが、モーセとイエス様を比較したのです。使徒行伝 7章を見ると、このステパノの証しについて詳しく書き記されています。

使徒の働き 7章 37節

「このモーセが、イスラエルの人々に、『神はあなたがたのために、私 のようなひとりの預言者を、あなたがたの兄弟たちの中からお立てになる。』と言ったのです。」

パウロもコリント人への手紙に、「私たちの先祖はみな、モーセにつくバプテスマを受けた」と書くとともに、「主イエスにつくバプテスマを受けた」と記し、モーセは「イエス様のひな形」であることをはっきりと語っています。神のしもべモーセは、こんなにも頻繁にイエス様になぞらえられ、イエス様と一つにされています。私たちも、私たちの行なうご奉仕が自ら出るのではなく、ご奉仕の中心がいつもイエス様であるように、イエス様と深い交わりを持ちたいものです。

「まことのご奉仕」は、イエス様のために働くというよりむしろ、「生活を通して」イエス様を証ししていくことである、と言ったほうが良いのではないのでしょうか。「生活を通して」イエス様を証ししていくことは、決して簡単ではありません。それは自我を十字架につけることです。そこには、悩み、苦しみ、誤解も、数限りなく起こってくることでしょう。モーセは、「まことのご奉仕」をするために、八十年もの苦しみの訓練の時間が必要でした。まことの訓練の場所は、教会での交わり、兄弟姉妹の交わりのうちにあります。

今まで二つの点について考えました。

第一番目、みこころにかなった奉仕とは何か。

第二番目、モーセとイエス様との比較について。

第三番目の点について、一緒に考えたいと思います。すなわち、「いかにして主のしもべとなることができるのか」ということについてです。

そのための欠くことのできない六つの土台石は何か、これを考えてみたいと思います。

1. 競走と戦い
2. 信仰と信頼
3. 自由と解放
4. 主の支配
5. 異種のものとなること
6. おのれを捨てること

1. 競走と戦い

すでにイエス様の救いにあずかった人々に、ヘブル書の著者は次のように書いたのです。ヘブル人への手紙 12章1節

こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。

はし 走るだけでなく、はし つづ 走り続けることが 要求 されています。

モーセは戦いの中で生まれました。モーセが生まれたところ、そこは戦いの世界でした。モーセは二つの国の真ん中に生まれたのです。

出エジプト記 1章22節

また、パロは自分のすべての民に命じて言った。「産まれた男の子はみな、ナイルに投げ込まなければならない。女の子はみな、生かしておかななければならない。」

これはどういうことかと言いますと、エジプトに囚われの身となっているイスラエルの民はどんどん増え広がり、非常に強力になったので、エジプトの王であるパロはそれを見て、イスラエル人にエジプトの国を取られたらいけないと思い、これ以上イスラエル人が増えないように、「イスラエル人の産む男の子はみな、産まれたらすぐ殺さなければいけない」という命令を出したのです。モーセが生まれたのはちょうどそのようなときでした。

モーセは戦いの中に生まれたと言いますが、まことに、モーセは戦い以上のもの、命の危険にさらされながら生まれました。モーセの母はかごを編み、そこに生まれたばかりの幼子モーセを入れて、川の岸、葦の中に隠したのです。これはモーセの母の考えだけでなく、主ご自身がそうさせられたに違いありません。モーセがかごに入れられて置かれた場所は、「死の川」ナイル川の岸边でした。モーセの母は、全能なる神は、死の川ナイル川からでもモーセを救うことができると信じました。

これは実に見事な「救いのひな形」なのではないでしょうか。イエス様はモーセが入られたかごのように、救いの箱船となってくださいました。全人類はイエス様の箱船の中に入れられました。イエス様が十字架につき、死なれたときに私たちもともに死に、よみがえられたとき私たちもともによみがえられました。イエス様は、「死の川ナイル川」から、モーセと同じように私たちをも引き出されたのです。モーセという名前の意味は、「引き出された者」です。

モーセは、死の川から引き出され、エジプトの王パロの娘の子とされました。私たちも罪の力から引き出され、神の子どもとされました。天からの啓示に背かないということは、戦いの中に投げ込まれることを意味しています。私たちは救われ、私たちが神の子どもとなり、イエス様は私たちのものとなられ、私たちは主のものとなったと心から喜ぶことができる身となりましたが、後で戦いがやってきました。パロのように、悪魔は力を尽くして、私たち「神の子ども」をイエス様から引き離そうと努めます。悪魔は往々にして成功する場合があります。信者がサタンに攻撃されいながら、それに気がつかないことこそ危険です。悪魔はあたかも自分が光の天使であるかのように装ってやって来ます。

私たちは今、このような戦いに面と向かっています。悪魔は、自分に許されている時がいくらもないことをよく知っています。悪魔が神の子どもを霊的に成長させないようにする力は、超自然の力です。主のしもべは、その生活の初めから絶えざる戦いの真ん中に立たされています。もし悪魔が私たちを攻撃してこないなら、むしろ私たちは主のために役に立つしもべとなれません。

2. 信仰と信頼

イエスの弟子であるヨハネは、その第一の手紙の中に次のように書いたのです。

ヨハネの手紙・第一 5章4節

なぜなら、神によって生まれた者はみな、世に勝つからです。私たちの信仰、これこそ、世に打ち勝った勝利です。

と記されています。モーセは生まれ落ちるなり信仰によって守られました。母親は信仰によってモーセを救いました。

へブル人への手紙 11章23節

信仰によって、モーセは生まれてから、両親によって三ヶ月の間隠されていました。彼らはその子の美しいのを見たからです。彼らは王の命令をも恐れませんでした。

どうして恐れなかったかと言いますと、「主を恐れた」からです。このへブル書11章は、「信仰の英雄の書」と言われています。しかし、多くの人々は人物に気を取られて、その人の「信仰がどうであったか」を深く考えません。この書で大切なのは「信仰」なのです。主なる神に対するまことのご奉仕をするためには、信仰が一番大切です。モーセの生涯は、生まれ落ちるなり信仰とは切り離せない生涯でした。

主の国の歴史を見ると、実を残す奉仕をしたしもべたちは深い「信仰の根」をもっていたことがわかります。それらのしもべたちは、多くの問題や苦しみを持っていました。しかも負いきれないほどの問題を背中に背負っていたのです。

パウロは、正直に自分の経験した悩みについて書き記したのです。

コリント人への手紙・第二 1章8節、9節

兄弟たちよ。私たちがアジアであった苦しみについて、ぜひ知っておいてください。私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、ついにのちさえも危くなり、ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟しました。これは、もはや自分自身を頼まず、死者をよみがえらせてくださる神により頼む者となるためでした。

モーセの両親は、信仰をもってモーセを三ヶ月の間隠しました。しかも聖書は、モーセの両親は「王の命令をも恐れなかった」と記しています。何がそうさせたのでしょうか。両親の「信仰」が、恐れを取り除いたのです。多くの方は、パロの力は恐ろしい、今は従

うより仕方がないとパロを恐れてパロに従いました。しかし「信仰」は、自らをパロには従わせません。「信じる者には不可能なことはない」と言わせませす。

モーセの両親は、どんなにほかの人々がパロを恐れパロに従っても、「自分はそうしない。主に従う」という断固とした「信仰の態度」をとったのです。歴史を見るとわかります。すなわち、主に喜ばれるまことの奉仕をした人々は、生きている間ある程度までひとりぼっちでした。その人が死んでからのち初めて、「あの人は『信仰』の人であった」と崇められています。

私たちも、ひとりひとりがどうすることもできないような困難にぶつかるかもしれません。そしてその時、もう駄目だ、望みがないとくじけてしまうなら、主へのまことの奉仕者とはなりません。「信仰」は、主の力と主の富を余すところなく自分のものとする力です。

モーセの両親は、「できないことはない。主は、なしたもう」と、信仰の決断をしてからというもの、ほかの人々とは別の者となりました。ほかの人々から離れ、寂しく過ごさなければならなかったかもしれません。

信仰とはいったい何でしょうか。それは主との結びつきです。もし、主との親しい結びつきがあるなら、パロとパロの命令は少しも恐ろしくありません。もし、私たちが主のしもべとして、暗闇の中にいる多くの人々を、悪魔の力から「神の光」のうちに導き出そうとするなら、なんとといっても先ず主との結びつきが、主との交わりが必要です。この信仰こそどうしても必要なのです。

3. 自由と解放

アブラハム、イザク、ヤコブの神のあのヤコブは、「神よ、我を祝せずば去らせず」と主の祝福を迫り、ついに主による解放を経験し、主のしもべのひとりとなりました。「私を祝福してくださらないなら、あなたを去らせませす」。

モーセの場合も同じでした。もし主なる神がモーセを祝福し守ってくださらなかったなら、モーセは産まれ落ちるとすぐパロの手で殺されていたはずで、心から主に仕えようと志す主のしもべは、望みのない行き詰まった状態に遅かれ早かれ追い込まれるものです。「主の力によらなければどうすることもできない」といった状態に追い込まれるのです。そのようなところに追い込まれると、私たちはもう駄目、奉仕もできなくなった、何もかも駄目だと、完全に失望してしまう人々がもちろんいます。そのようなときには、イエス様の御前にありのままの姿で出て、叫び求めましょう。主は必ずそれに答えて解放してください。その解放の経験は、回心の経験よりさらに大きく喜ばしい経験です。

解放は、主のものとなるために、すなわち救われるために必要ではありません。私たちがモーセと同じように主のしもべとなり、暗闇の中にいる人々を神の光のうちに導き入れる人となるために、解放の体験が必要なのです。また解放された者には、限りない主の満たしが伴うのです。

しゅつ き しょう せつ
出エジプト記 2章 10節

その子が大きくなったとき、女はその子をパロの娘のもとに連れて行った。その子は王女の息子になった。彼女はその子をモーセと名づけた。彼女は、「水の中から、私がこの子を引き出したのです。」と言ったからである。

いまはな 今話しましたように、モーセという名は、「引き出された者」を意味します。モーセは、主なる神による救いと解放を経験した人でした。四つのことが言えると思います。

- ① 王のもとで教育を受けるために、「死の川ナイル川」から引き出された。
- ② 成人してから主と荒野で親しく交わるため、この世から、パロの影響から引き出された。
- ③ イスラエルの民をエジプトから導き出すために、荒野の孤独から引き出された。
- ④ 神の栄光を拝し親しい交わりに入るために、イスラエル人の間の宗教的な煩わしさから引き出され、シナイの山に連れ出された。

モーセは、引き出された主のしもべでした。私たちもまことの主のしもべとなるには、モーセと同じように引き出され、解放されなければいけないのです。そのために、ヤコブのように、「私を祝福してくださなければあなたを去らせません」と、私たちも主に迫りたいものです。

まことの神のしもべとなるためには、六つの土台石が必要です。すなわち、天からの啓示に背かないことです。その結果は何であるかと言いますと、「競走と戦い」、「信仰と信頼」、「解放と自由」です。

4. 主の支配

ヨハネの黙示録 2章 13節前半

「わたしは、あなたの住んでいる所を知っている。そこにはサタンの王座がある。」

聖書でエジプトと言え、この世を表わしています。この世は、悪魔の力のもとにある世界です。モーセは、このエジプトで生まれ、エジプトで教育を受け、エジプトの環境で生活しました。だれがモーセをエジプトに導かれたのでしょうか。主ご自身です。パロのもと、悪魔の影響下に導かれるとは、なんとという導きでしょう。四十年間、主はエジプトにモーセをとどめて訓練なさいました。そこでモーセはいろいろな苦しみを通されなければならなかったのです。それは、まことのしもべとなるための尊い訓練でした。もしエジプトにおける訓練がモーセになかったなら、モーセは決して主に用いられるしもべとはなれなかったでしょう。

主は私たちにも、「わたしは、あなたの住んでいるところを知っている。そこにはサタンの王座がある」と言っておられます。全世界は悪魔の王座です。ですから、私たちがど

んなに暗いところを通されても不思議ではありません。私たちはサタンの王座のあるところに住んでいるのですから。けれどそのようなところに導かれたのは主ご自身であり、永遠の愛をもって私たちを愛しておられる全能なる主である、ということなのです。悪魔の座の上に、光り輝く主なる神の座があります。

いったいどうして、主はわけのわからないところを、暗いところを通されるのでしょうか。それは、私たちが悪魔の支配に落ちている人々を、神の光の中に導き入れることのできる「主の満たし」にあずかる主のしもべとなるためです。「わたしは、あなたの住んでいるところを知っている。そこにはサタンの王座がある」と書かれています。これは尊い主の学校であり、訓練の場なのです。

主は、私たちが示されている使命にかなう者となることを望んでおられます。私たちが救われた恵みにとどまらず、「主の満たし」に至ることを主は心から願っておられるのです。

天からの啓示に背かない結果、また主に用いられるしもべとなるための土台石は、今話しましたように、競走であり、信仰であり、解放であり、また主の支配です。

5. 異種の者となること。世と全く異種の者となること。

ヨハネ伝17章を見ると、イエス様は当時の弟子たちに次のように言われました。

ヨハネの福音書 17章 16節

「わたしがこの世のものではないように、彼らもこの世のものではありません。」

これは動かすことのできない事実に対するイエス様の証しです。モーセは心の中で自ら、自分は他の者と違うことを確信していました。ほかのエジプト人と全く異種の者であることを自覚していました。自分はエジプト人とともに生活しているけれど、エジプト人と同じではないと。もし私たちがこの世の人々を主に導く者になりたいならば、自分はこの世の者とは全く違う者であることを自覚しなければいけません。もし少しでもこの世と妥協するところがあるならば、主はその人を用いることがお出来になれないのです。

この世との異種性は、いつも現われます。この世の人々は、違った種類の人間であり、私たちにつまずきます。感情を害することもあります。ときには、怒ることさえあります。

「わたしがこの世のものではないように、彼らもこの世のものではありません。」「真理そのもの」であられるイエス様は、そうおっしゃっています。

これは、自分で世の人と違った者になろうと思っただけで成るものではありません。イエス様の御姿に変えられて初めて、本質的に世のものと違う者となることのできるのです。イエス様はこの世に生きておられたとき、ほかの人々には見ることもできない友情とあわれみに富んだお方でした。ほかの人々と本質的にイエス様は全く違ったのです。「わたしは世のものではない」と言っておられる通りです。イエス様は、自分は彼らと違う、いつもこ

の自覚を持っておられました。これはイエス様の奉仕の力の源だったのです。この内面的な相違こそ、主のしもべの生涯の力の秘密です。

この内面的な相違は、モーセの心にイスラエルの民をエジプトから導き出したいという強い願いを起こさせました。起こさせたのです。もし私たちも、この世の人々と自分は本質的に違う、ということを知っているならば、なんとかしてこの世の人々を主の国に導きたいという深い願いを持つようになるのです。

パウロも、モーセと同じく、自分は周りの者と本質的に違うということを自覚していました。彼は次のように言ったのです。

使徒の働き 26章 29節

「ことばが少なからうと、多からうと、私が神に願うことは、あなたばかりでなく、きょう私の話を聞いている人がみな、この鎖は別として、私のようになってくさることです。」

と。「わたしが世のものでないように、彼らも世のものではありません」。この力の秘密を深く知りたいものです。

6. おのれを捨てること

イエス様は次のように言われました。

マルコの福音書 8章 34節

それから、イエスは群衆を弟子たちといっしょに呼び寄せて、彼らに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」

先ほど、世の人と全く本質的に違うものであることを言いましたが、そこには常に妥協の試みが伴っています。しかし、もし私たちが主のしもべとして生きたいなら、はっきりとした立場をとる必要があります。それは、おのれを捨て、主にだけ従うことです。

モーセは、いったいどのような態度をとったのでしょうか。

へブル人への手紙 11章 25節、26節

はかない罪の楽しみを受けるよりは、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。彼は、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる大きな富と思いました。彼は報いとして与えられるものから目を離さなかったのです。

よく考えて祈りながら決心したのです。苦しむことを、モーセは選んだのです。もし、モーセが妥協するなら、素晴らしく高い地位と名誉が与えられたはずです。モーセはエジプトの皇太子でした。もし妥協したなら、当時世界最大の文化を誇っていたエジプトの富は

ぜんぶ モーセの 懐 に 転がり 込んで きたはず です。けれど モーセは 自らを 捨て、自らを 否定 しました。

変貌山に 現われた ことから 推して、モーセは おそらく 旧約時代 最高の 人物で あったと 想像 できます。

申命記 34章 10節

モーセのような 預言者は、もう 再び イスラエルには 起こらなかつた。彼を 主は、顔と 顔を 合わせて 選び出された。

と 記されています。

モーセは、エジプトの 宝を 捨てた 甲斐が あったのでしょうか。救われる ためにおのれを 捨てることは 全く 必要ありません。けれど、主の しもべとして 用いられるには、おのれを 捨てる ことが 必要です。しかも、そのためには 最愛のものさえ 捧げなければなりません。値 が必要です。

おのれを 捨て 主に 従いましょう。神の しもべとして おのれを 捨てる ことより 以上の ことを する必要は ありません。しかし、それ以下 であっても 断じて いけません。

了